

滋賀縣尋常	中學	部類	記号	冊數
藏書	左	一	五	

續
近世
畸人傳
二

281
48
Vol 2



續近世畸人傳卷之二

里村銀巴

里村銀巴本姓の松平氏。如く無名で中野應院の唱食より。よく志ありと。たゞいざいざと。いふも。凶名を天下にふるんや。ついに肉桂の時。其僧ありて。さるる南都より。さるる連子を。さるる。うめられをぬじり。その。銀巴の。本土の連歌師大東正云に。さるる。肉桂の。て。その。名天下にあま。巴

の里村と留一介人。又臨江村の号ハ三條西禰名院也ハ
行一^{ともは}其公の御孫也臨江の三字亦ハ天童寺の某者
也乃遠去テ南都ヲ傳ハる人ナリ。乃々後任任^たる
日向に及ヒテ智光寺本然寺に押セ。事遂行ハル
信正の母は信何れ也。ゆえに接疎^たるなり。
南漢陽光院の宮後陽成院の御文新即位
のふりのふりハ御節とありハ
城兵ありつゝ陽光院宮の某ハ^{ゆえに}
其無^し之。公汝と^し
やうて自樂と^しりきよし。ゆえに位と
賜^りし。思ハ術^{なり}。
其と^りて^し。
法橋^ハ。
中^ノ。
母^ハ。
先^ハ。
其^ハ。
皆^ハ。
の^ハ。
中^ノ。



とて首ぐぬりしと句と作られたる。詔曰二三遍沈吟
して。ふも非ぬ入申句として。穠草のさくさく分
まば。と詔色が影を流し流し。雪のふりさけりし。百舎の
くたわいせしと作する時。詔曰さうしき例も。是法
にあたりくすづくるまねごとしと作す。わいへくわ
不斜無下ぬり。詔曰の。うんぬんぬんと作する。ま
こすした舞妓の時。貞世著しし。いさかよる。のり
たかりし。

こころが。色にせし。まらば。うもまらば。せし。こころと
こころの。おま。その。あま。を。ありし。は。ゆ。
ぬ。逝きし。度。長。す。年。へ。人。は。ろ。中。に。正。安。院。は。墓。あり

本阿弥光悦

本阿弥は光悦を虚座より自徳齋後返春。しもまらば。本
依。よ。本の。あ。族。多。買。豊。後。身。高。定の。孫。片。島。治。吉。丈
宗。春。乃。三。男。ありし。ある。は。光。悦。心。が。ま。子。こ。ろ。を。所。依
ハ。刀。無。鑑。定。廣。徳。淨。我。等。と。家。堂。と。い。わ。と。あ。は。し。
の。こ。も。も。と。り。し。と。り。に。光。悦。の。あ。ま。り。も。ま。ら。ば。の。こ。も
と。り。の。あ。り。淨。我。の。ま。ら。ば。光。悦。の。あ。ま。り。自。徳。齋。
こ。も。り。の。あ。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。
く。の。カ。と。相。と。し。つ。ら。あ。り。る。一。く。る。あ。ま。り。も。ま。ら。ば。の。あ。ま
通。御。之。懸。院。殿。光。悦。よ。と。う。な。ま。今。天。下。に。録。書。と。り
ハ。旅。の。り。と。り。の。あ。ま。り。光。悦。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま
あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま
ありし。と。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま。り。の。あ。ま

光緒の御世に於ては、
 皇朝の文藝は、
 益々進歩を遂げ、
 其の精華は、
 海外に傳へられ、
 各國の文藝家、
 皆これに感服す。
 此の如きは、
 皇朝の文藝が、
 益々進歩するに、
 由る所也。

光緒八年、光緒皇帝、
 御製「皇朝詩經注」を、
 御筆に成され、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、

光緒の御世に於ては、
 皇朝の文藝は、
 益々進歩を遂げ、
 其の精華は、
 海外に傳へられ、
 各國の文藝家、
 皆これに感服す。

此の如きは、
 皇朝の文藝が、
 益々進歩するに、
 由る所也。

光緒八年、光緒皇帝、
 御製「皇朝詩經注」を、
 御筆に成され、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、

光緒の御世に於ては、
 皇朝の文藝は、
 益々進歩を遂げ、
 其の精華は、
 海外に傳へられ、
 各國の文藝家、
 皆これに感服す。

此の如きは、
 皇朝の文藝が、
 益々進歩するに、
 由る所也。

光緒八年、光緒皇帝、
 御製「皇朝詩經注」を、
 御筆に成され、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、
 其の文、
 簡潔明瞭、
 且つ、
 其の意、
 深遠に、

と、いへば、さうして、一つは、その御恩に、
殿の御恩は、いふに、お前の御恩に、
きく。彼陣お蔵と、いふに、お蔵に、
けくお蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、
お蔵に、いふに、お蔵に、



軍津に降いでる必能後者よりあるは...
 一わらうつて親づん。くそのなをま...
 軍津に降いでる必能後者よりあるは...
 一わらうつて親づん。くそのなをま...
 軍津に降いでる必能後者よりあるは...
 一わらうつて親づん。くそのなをま...

子松原へ

子松原へは遠い出せぬ家士お落の師く...
 是久前正徳林比敷より。着よりは...
 孫と親也。團圓大系部に難女...
 衣令らと絵とまの店宅の隣に暮す...

葉ののちるとん...
 團へ輝く...
 眼の中...
 影...
 顔...
 顔...
 顔...
 顔...

と出てくるまゝの二法目より費すべし。人にもとむるに
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
我々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の
つ。人々の罪のついで。莫業と費すも價を下す。人々の

ふ田長共衛

原田も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、
も、初他馬豊忠侯のまゝりしが、改行しては、

かりぬ。ちりてて女の人へ船とせしや。こもつてていふ
 奥うづらてしう水とゆ。おし湖人の舟といふづらふち。又
 十三日信濃ふ天野川をゆく。御坊より遠江のふ所。此
 舟とて。今どおよ。別あ上つてせむ。いふらに流る
 とづらぬ。舟か。こし。き。舟。流ふ。人。件。殿。ま。ま。あり。大
 本。巨。石。と。運。ぶ。ま。ま。を。や。り。し。う。め。又。む。て。体。見。の。里
 より。い。ふ。術。て。運。送。も。元。も。体。水。の。ま。比。大。件。の。基。より
 む。さ。ま。事。六。月。より。て。そ。ろ。と。づ。ら。い。ま。ま。と。う。が。て
 ひ。ら。な。ま。は。流。と。つ。お。い。の。ち。か。ち。ふ。六。孫。殿。ま。と。り。て。し
 と。い。ま。せ。う。不。日。り。本。石。こ。く。ま。ま。り。ん。ん。人。ま
 ち。れ。ま。づ。ら。ん。り。し。と。か。ん。十六日。又。宮。よ。も。し。う。鴨。川。よ
 り。て。あ。だ。今。の。ま。津。川。も。十九年。せ。ふ。さ。し。富士。川。壑
 て。船。の。う。い。か。わ。り。り。ら。ん。お。と。り。お。ま。さ。い。も。く。痛。ふ。ま。く。わ
 り。ら。ん。息。ま。と。て。ち。ら。む。三月。り。後。と。あ。て。七月。お。流。可。う
 へ。以。病。息。ま。り。や。う。て。と。ふ。く。り。ら。ん。や。ま。ご。ま。ま。ら。づ。ら。ら
 ち。二。日。お。み。せ。り。慶。長。十九年。甲。寅。七月。十二。日。高。の。み。六。一。日。其
 中。の。夏。茂。心。ま。大。慈。圖。と。ま。ま。い。ひ。み。隠。む。し。ま。ま。し。し。り。
 寂。肖。像。と。ゆ。り。大。慈。心。の。側。お。ま。ま。と。巨。綱。と。あ。ま。く。所。に。
 和。と。ま。ま。と。石。誌。と。ま。ま。と。後。を。遠。敷。の。ま。ま。の。し。碑。と
 と。罪。山。林。氏。に。ま。ま。と。建。う。ま。の。つ。く。

熊。巨。川。号。舟。楫。遍。浮。鴨。水。号。梁。如。虹。矧。復
 鑿。富士。河。号。有。成。功。慕。其。賜。去。ま。ま。号。笑。被
 化。黄。熊。嵐。山。之。上。号。石。不。朽。而。無。窮。

寛永六年冬十一月日

け一係... 猶一の... 司... 撰富...

... として... 氏撰富...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

... 能... 能... 能...

うりくちをばらばらとせしめしむ。其の書に
 後よりありしは、いふに、夫れは、いふに、
 とうのつ。又、殿の、いふに、いふに、
 物に、いふに、いふに、いふに、
 操るが、いふに、いふに、いふに、
 あり、いふに、いふに、いふに、
 業排措置して。意は、固く、いふに、
 せり、いふに、いふに、いふに、
 又、いふに、いふに、いふに、
條は、いふに、いふに、いふに、
 中、いふに、いふに、いふに、

其の書に、いふに、いふに、
 た、いふに、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、

其の書に、いふに、いふに、
 二冊、いふに、いふに、
 解、三冊、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、
 其の書に、いふに、いふに、

男つら。は言ぬの陽の
見えの既也

無善無悪の體

有善有悪の體

無善無悪の體

為善為悪の格物

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

たふらむるの事と申さるるに、
久世の事と申すに、
元文二年冬
希賢七十一歳

後文と申すに、寛保に甲子年
辛未年六月、島に大いなる
暖候なる事、新著中、養子
の書あり。此の是、海と
關、
養子、
化、
可、

國、
關、
神、

物、
神、
松岡怒庵 附 始若水

之、庵、
神、
張、
あ、
か、
く、
本、
究、
二、

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 20 lines of vertical columns.

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 10 lines of vertical columns.

Vertical text in the top left margin, likely a title or introductory notes.

Handwritten Japanese text in cursive style, continuing from the main body or as a separate section.

此山のみ尋仙と云ふ事也。在河津の教授諸君は、
是より、使宗入りて、
三年より、
光緒の年、
國歌御階と云ふ書ありし、
と人道のたより、
婦人、
と云ふ事ありて、
て漢書堂と云ふ、
早稲

素原為漢

名、
流華の、
分の諸、
乃、
光、
は、
中、
と

三角亭記
余嘗於後園中開試馬場長不及五十步廣僅可旋馬傍植花卉外鑿芙蓉溝內築小堤偶記俞退翁三角亭詩曰春無四面花夜欠一簷雨同話錄花為韻作余仁廓余愛其句深服其意凡天下之花無四時無五色雖有躑躅紫燕稱四李歲中三開耳余家五色梅分淺深紅足數何索墨梅何貪四面竊思三角之為物則方之半矣缺盈之戒無以加焉因欲倣之構亭於西北隅庶乎不妨旋馬焉有志未果客歲病眼折足不堪騎乘遂放馬徹調馬埭鋤為菜圃今茲春晚有人告曰有廠材價不滿一貫文盍安堤上也余心搖焉召二老僕謀之僉曰不用請陪其價可辨矣日亭午此去神山幾里春水方漲編柁乘流二人而足余從之薄暮果致杉材十餘根於門下明日召匠構之曰務存斧鋸痕謹勿施龍斲不日成之又翌日葺第至三日落之時三月十二日也揭蓬窗子扁忽官書至飯于亭歸于府他日心常在此亭七月之望歸鄉坐卧亭中仰看青山俯觀紅蕖始償平生因為之記云

三角亭記

余嘗於後園中開試馬場長不及五十步廣僅可旋馬傍植花卉外鑿芙蓉溝內築小堤偶記俞退翁三角亭詩曰春無四面花夜欠一簷雨同話錄花為韻作余仁廓余愛其句深服其意凡天下之花無四時無五色雖有躑躅紫燕稱四李歲中三開耳余家五色梅分淺深紅足數何索墨梅何貪四面竊思三角之為物則方之半矣缺盈之戒無以加焉因欲倣之構亭於西北隅庶乎不妨旋馬焉有志未果客歲病眼折足不堪騎乘遂放馬徹調馬埭鋤為菜圃今茲春晚有人告曰有廠材價不滿一貫文盍安堤上也余心搖焉召二老僕謀之僉曰不用請陪其價可辨矣日亭午此去神山幾里春水方漲編柁乘流二人而足余從之薄暮果致杉材十餘根於門下明日召匠構之曰務存斧鋸痕謹勿施龍斲不日成之又翌日葺第至三日落之時三月十二日也揭蓬窗子扁忽官書至飯于亭歸于府他日心常在此亭七月之望歸鄉坐卧亭中仰看青山俯觀紅蕖始償平生因為之記云

三角亭詩

乘孰空負四方志
三角亭中夢亦奇
忽怪蟲聲開一面
深歡月影照多時
人間交際重謙損
天道循環警

滿虧。窻自不妨。八風至。林頭長掛。退翁詩。

三角亭中獨煎茶。人言封閉縮如蝸。直方難處下流地。圓轉何停峻阪沙。有冰有山常可月。無冬無夏永觀龍。比年患眼偏嫌白。藍紙粘窻同碧紗。

壽碣銘

奧田士亨字嘉甫號蘭汀亭曰三角南山古稀所賜號也。小字宗四。宜休大人季。為伯龍溪嗣。服嫂堀口氏喪十四。遊學宇治十九。上京師事東涯先生十一年。廿二命校名物六帖。深叶師意。爾後編述必專任焉。廿九擢津府賜十口俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史半年。旬豆竣功。癸未領百升石。庚寅東下留柝。

郊九月壬辰班掌鎖右。褒學術也。甲午轉中廳賞蓋

書萬卷與家丁卅負器械也。丙申告老尚賜退俸十

口。隔日入侍。或至夜分。所賜書畫扇巾衣裳至襦帶

山積不止等身矣。今茲己亥不幸會嫡士元喪。忝蒙

丙公存問。仍有花養賜。臣庶之家未之前聞也。特歲

七十七。先孀土井氏二男。次曰正集。冒岡部。三女長

配侄士弘。餘天後孀細江氏一男曰叙典。冒吉村。內

外孫十四人。歸孫七人。五十年来門生踰八百。今存

百數。身後恐或溢美。自撰壽碣銘曰。

起于田間。升中廳直。何以得之。稽古之力。

加之美標鳩

加之美標鳩。甲安國山。梨部山。王佐

夜の神職人々より温妻奉ぬる。博學多聞。圃をた
 きし。儒佛道家音律者。天文曆算の事。よく問わ
 れ。和字より凡行書の書ふ事。又字よりハカシ書す。やま
 初。あやふし。法も。線香とくゆらし。その光とたのますと
 けり。や。或るは。漢圃九十。ま。り。ハカシ者。ハカシ。ハカシ。
 福要と。り。り。行。ハカシ。と。脱。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 年。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 きの。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 序。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 一。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 二。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 三。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 四。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 五。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 六。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 七。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 八。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 九。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 十。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。

夜の神職と後。圃をたきし。博學多聞。圃をた
 きし。儒佛道家音律者。天文曆算の事。よく問わ
 れ。和字より凡行書の書ふ事。又字よりハカシ書す。やま
 初。あやふし。法も。線香とくゆらし。その光とたのますと
 けり。や。或るは。漢圃九十。ま。り。ハカシ者。ハカシ。ハカシ。
 福要と。り。り。行。ハカシ。と。脱。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 年。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 きの。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 序。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 一。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 二。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 三。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 四。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 五。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 六。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 七。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 八。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 九。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。
 十。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。ハカシ。

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

後河の白浪の音

舟に上りて舟の音なりぬる

遠き舟の音

舟の音なりぬる

舟の音なりぬる

舟の音なりぬる

舟の音なりぬる

七十六七げりりみりぬるなりぬる

森正岡

正岡の森氏号寂斎。本肥後國河蘇大宮司三家乃

内河蘇郡と云ふ森と云ふ森の孫にして。紀伊國より医家

として業あり。又佛宗の師也。まこと若くして一切神と

説説するれを以て京師に在る遠江の舟中にして泉

涌寺より来遊院を以て相見し。衣冠と遊。院を感して

正岡の吾院。高松と云ふ。流しを以てみふ。三年

の院院の教と果ては。みりぬる。信ん御道本町

店を以て専ら医術と施ほす。技わざぬふ。其一と云ふ

大和大和高取侯の招まねび。應じて。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

靈元上皇。仙洞よ人麿の社と造りて。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし。ゆりし

評多令及び不那の気味并庵の粗と魁とこれ
^{あり}刺醫人たつとむく。ましく大己貴命乃字の
衣輪を賜ふ。御よは服入し進む。且和歌と嗜し
敷聞の達しなれば。某卿の傳奏より自詠二十首と
よふこと。甚辛持よあしなむ。東園亭の号と賜ふ
とくし書院乃名多は。凡生傳の采巻うくの
あやしといふも。あいなむししてまうも。齋食は
持ら。くよりをうらむも。う歎の肉をこもらぬ。教
生にあつうふうとをせは。夜永侍儘の時うは勝平
教といふ薬を製して病者な施す。あど善業人の
にふあり。七旬有餘く病るく自死日とあり。
法胎を著し。端座して遊ば。醫術のまは

て家より傳ふ。一せねた人なむはるぬく養和寺集

の一日なり。いづも。火のこめたせむいふるぬ。ゆかり

早春。まをわの雪まよふ美軒のせせえんをるせむのけけは
あね。日まのぬいふとあふんむすむ水の花入もとて

山家月。まをらふむのあねは月の新くはふらぬ井のり
物業とほのあの花ももをふけしうはふははま業のま

不^{道端}久^{道端}。うくくらの園とあふま今はのあふまふまを
あまのこけ中まうまうたうね下もくされ

あまのこけま

端久仲

山家伯壽

端海字文仲通名順融。春莊と号す。書林をりしうで。隠操ありく。詩と能て名あり。天明のやううひてふに。春莊のやううひてふに。名付す書画北と懐きて。志この。諸名家もしてさうしり。此北のやううひてふに。たのよあり。春莊のやううひてふに。名付す書画北と懐きて。志この。諸名家もしてさうしり。此北のやううひてふに。たのよあり。

半開全盛競春光。日日歸家衣袖香。
酒館傳招僧院約。人情一月為花忙。

又
偷閑午日惜芳菲。惆悵蒼前復友非。

醉後縱能紅照面。時々作雪鬢邊飛。

六のうへ多年い人と情ふるた。死を別して次去絶早あり

詩歌曰

文仲戊申罹災。家産落。及。身復得疾。其病中五。秋。詩曰。因接林鐘暑更穉。上蒸下濕瘧瘟并。間。芻具醫調護。棺後。詩名天寵榮。老在引雛窮。巷寂。新篁灑月。敗簾清。五更行雨。交金吹。秋月。白川水北坐。作此詩後。遂不復起。終為絕筆。先。廬委。蓋。葬。彼。穉。銷。莫。債。居。貧。病。并。數。篇。詩。歌。五。侯。榮。每。移。夜。壑。令。何。促。墓。傍。青。山。骨。亦。清。得。句。猶。思。來。質。我。每。逢。風。景。感。逾。生。

上人未句自註曰。生每得詩。或有推敲未穩者。輒來詢之。余曰。某字。下。若。稱。其。意。別。修。然。會。不。置。喜。於。色。若。不。私。羞。則。然。也。不。復。學。也。不。會。儼。然。擲。曰。對。字。尚。勝。也。其。真。率。若。此。更。一。卷。

○九齡字伯壽。号蓋山人。不姓。加藤。近江。依木山。乃繁。信。多。色。の。人。詩。と。ぬ。く。ふ。り。と。も。書。じ。若。く。一。て。家。庭。小。津。よ。ゆ。急。家。才。に。量。を。終。り。化。邦。小。島。に。没。志。師。如。家。物。園。ふ。ら。一。母。あ。れ。孫。あ。る。に。り。て。そ。女。を。解。し。て。家。財。往。而。國。の。聲。人。と。多。能。の。實。子。院。の。寺。と。し。て。一。人。を。り。伯。壽。の。信。字。と。教授。し。と。も。ふ。る。寺。と。も。習。ふ。然。も。ふ。ら。う。ふ。所。能。乃。詩。奇。と。て。ち。も。そ。う。も。教。夫。と。と。致。ぬ。志。を。人。け。ら。に。集。る。あ。ら。む。そ。二。三。首。た。ふ。等。く。性。飄。造。世。教。を。且。古。約。と。經。法。と。り。と。と。ゆ。く。人。と。絶。仰。す。心。覺。幸。ふ。ハ。三。陽。羽。乃。字。と。信。し。と。り。京。師。中。あ。り。て。や。い。名。と。ま。り。は。此。と。也。之。く。痛。く。歎。す。と。し。む。べ。し。

此 沱湖 二首

萬頃煙波涵大清。琵琶何歲作湖名。園存石鹿皇都跡。藩壯金龜侯國城。諸島爭奇盤上峙。千山浸秀鏡中平。滔滔八百余川水。向此朝宗日夜聲。西北名山數十峰。巍然紫翠畫中濃。風前唵鳳笙。洲竹。磯上卧龍。蓋館松。天接中流涵日月。地開東海吐芙蓉。丈夫不識名區壯。宇宙何由披曠胸。

寄東適禪師

高僧丈室倚岩巖。千仞機鋒凌碧宵。講法臺前馴猛虎。參禪會上斬兒猶。寒溪明月敲冰。及暮嶺白雲分雪。樵父抱煙霞。負簞社。思師永夜夢。魂遙。

明祀曲

檀帳秋風憶漢都君王命妾和單于此身空解誤

明鏡恨在娥眉不畫圖

在二七のらぐ奇乃りいふていふもさるれども涯さきとふるこころ
あまうと嫌がしふ。前後の著とより好してさふさくれぬ人の
すくさくいふまゝこころいふがまゝこころをねがはせしと筆。今のれよ
伯耆とつらなせしていうら返道は終る

伊幻門

初阿。疎爰に師の急作の入りし。寺のこけは院とれる院
帰に流はゆるよ。さうまふまの願の着をたしうも。他階の
あれいしとくよ。いふの團ふり好してあるとぬりす。
後流よる疑よ。同右とら。他階をたすいふゆりのせり。
あら流しぬまなほも。そへ大切といふ。天明中のされ久きに院

は流る焼失してがらあまふたふたに師乃作にいらし
よ六をうらぐゆゑはあゆしむと。所盛とまりさうふ右の所
申顔の千巻灰乃すりちりしとくかかりて。佛工の
ゆもとえくもほむれ田中康朝は許多の令らるいぬめ
とさく強りし。佛工とまりていむれ。伴依よゆり
と所着と信。あら。あまらるは上階層も作らうてに
すふあまらる。又はあらの経い。ふさけ経紀と落はもく名
落るこころあつら幸に潤よむりと。寺の信さ熱愧乃
あはれし。まことらく信し愛後しとらと。初阿にさくはなり
て金をばすたぬきむり。いんまうらと。いんまもあはれも
まらこころあつら。いんま熱きり。さうらさたるらるに新
と信さむらわくもまうらふ。いんまのいんま。葉はのこ

朝暮換不可勝狀。甚尔一團黝席。僅函丈而氣象百
千盡。在几席間。不亦奇乎。法師既多。四方交遊。戶外
之屢。未免雜遝。則今之所營。唯同調者。而得以下榻
云。乃渴余。謂曰。某老矣。不復從運東西。此其臥而遊
息乎。願其可宗。猷穢而欣淨。是誠何心哉。師其村度
而命之。余曰。有是哉。其惟泊乎。夫泊也者。寄身一葉
之。上下無所定。四維無所亞。必也知其所以止而後止
焉。然目不得視。耳不得聽。彼寒山之鐘。江楓之
火。亦無所待。而有所待者也。經不言乎。見聞如幻。翳
三界如旅泊。故見而翳之。是謂不見之見。聞而幻之。
是謂不聞之聞。居界出界。方便之門。其在茲與。君豈
所待是舍諸。且夫華頂禪林。黑谷者。皆君所宗。宗而
之。此非所以羨堵于旦暮乎。昔者吾至。覺國師居相
之三浦。名庵曰泊船。聞邑舊翁寓武之溪川。亦有泊
船之室。是猶有繫乎水與船者也。今法師之營。非水
而山。不船而泊。泊之時。義於是遠矣哉。法師曰。善哉。
請已斯言。勿忘。

天明丁未十一月

淡海竺常撰

泊菴本為朋簪而設。既而以謂樹下塚間。非敢所望。
降此則一把之茅。猶為有餘。豈可看長物乎。遂乃捐
之。移於陽向道院。替為佛堂。畧無顧惜。念於是泊菴
之為泊。名實念副。烏即大典禪師所舍。為得其真。
矣。唐詩有之。微燈一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法

